

共通目標の探求

立つたものか。ともあれ、青年は未来に直結する。その語る第三勢力とは如何なる基盤に立つものか。それを汲みとるのは青年の指導にとって重要な課題の一つであろう。

なおこの調査研究に當り京大佐藤幸治教授の積極的な御指導に深甚なる謝意を表す次第である。

ることが困難であることを示す一方、客観的テストの様式による場合には、妥当性に一定の限界はあつても、被調査者の見解を引出して、打診するのには有利なことを示すものともいえる。また第一調査を受け、又その結果を考慮して作成した第二調査の設問を見て、問題の焦点が比較的はつきりして、その検証が一步進んだことを示すものともいえるので、この調査の目的はある程度達せられたものとみてよからう。

- (3) 自由記入様式の二つの質問に、その方法を実施に移すための準備を聞いたのであるが、元來この問題自體が將來に對する心構えを考究しようという性格をもつてゐるので、前文の方法について論ずる場合とはつきりした區別がつかず、整理にも困難を感じ、また回答の數も少なかつた。
- (4) 自由記入様式の二つの質問では、自ら立つた立場に立脚して、その持論の盲點を内省せしめたのであるが、反對の立場の場合に言及したものがかなり多かつた。そして軍備必要論者が、その陥る危険性を指摘しているよりも、むしろ軍備反對論者が痛烈にそれを衝いているという傾向さえみられた。一般に反對の立場の缺陷を衝くのは、自分の持つた缺陷を自省することよりも容易らしい。
- (5) 第二調査Eで、對外活動は10に含めていたはずだが、はつきり掲げた方がよかつたと思う。
- (6) 被調査者が、その調査の時期に發行された有力綜合雜誌によつて、その言論の引用に、質問の回答にかなり影響されているやうにうかがわれたが、これは一つの別の問題を提供するように思う。
- (7) 本研究を「人文」に發表すべく西京大學の調査範圍が餘りに狭きに失したことは残念であつたが、擔當學生の數の關係で止むを得なかつた。しかしこの程度の統計から學生一般を律することはむりであつて、ただその一端を推せるわけである。この種の研究があらゆる地域と分野の青年を對象として遂行されてはじめてその目的を十全に達し得るであらう。

一〇 問題の展開

二つの世界の對立の中にもまれているアジア、その悩みを青年は訴えている。「親米も親ソも」、この輻輳のうちに青年は悩んでいる。しかも屈服は青年の情熱が許さない。そこに一つの構想 第三勢力 が生まれる。それははつきりした理論體系も、地についた行動基準も持たないあいまいもこたる概念に立つている。しかし青年の理想追求の意欲はその夢を凝視しつづける。

政治は現實である。前進する歴史の創造がこの第三勢力の存在を肯定し、許容し、育成するか、それは觸媒的役割としての過渡的なものか、そしてまた胎動のうちに葬り去られる宿命に

八 結 論

- (1) この調査の結果では、戦争を絶対に否定しているものが頗る多く、場合によりて肯定するものは全体の二割強であつて、絶対肯定者は極めて僅少である。
- (2) 従つて軍備反対の立場をとるものが大多数である。
- (3) 完全なる獨立のためには、第三勢力の形成（アメリカ支配の脱却とソ連支配の防止によるもの、及び兩者との友好をつづけながらというものを含めて）の意欲が非常に強く、一般に中立的立場をとらうとする傾向がうかがわれる。
- (4) 男子はアメリカ支配よりの脱却が壓倒的に多く、女子はアメリカとの友好と脱却が相半ばし、女子は男子に比し一般に親米的である。
- (5) 軍備について、警察だけでよいというものが過半数を占め、現在の保安隊だけでよいというもの、現在は不要だが將來は必要というもの、さらに増強を必要というものがほぼ同数で、警察だけでよいというものの約6分の1である。
- (6) 抵抗の方法としては、アメリカ支配よりの脱却、經濟體制の隸屬からの解放という自立の要求が強く、戦争を避けて先ず國內の整備、國力の充實をしたいという意向、また對外活動を活潑にし第三勢力の形成につとめたいという意見が支配的である。中にはレジスタンス、無抵抗主義もみられ、青年の理想主義と積極性がうかがわれるが、一般に矯激であつたり、自棄的な考え方をとるのを戒めて、堅實である。
- (7) 抵抗の方法は男子は積極的で、女子は消極的である。
- (8) 軍備に伴う危険性の防止としては、軍人の政治參與の禁止、文官優位性の堅持など制度的な問題から、健全な民主主義精神、良識を養うと共に、外國の依存態度を捨てようとして、獨立への要求に及び、これまたたとえ軍備は肯定しても平和、獨立への希求が基底に横わつていることがうかがわれる。

九 検 討 と 反 省

- (1) フィードバックの重要條件であるグループ、ディスカッションが、第一調査と第二調査の間に持たれるべきであつた。しかし一室に多人數を擁し、これを群に分つて指導することはとうていできないことなので、ただ被調査者に、第二調査の実施までに反省と相互研究しておくよう指示を與えるに止めた。
- (2) 第一調査の自由記入様式と第二調査の同問に對する質問様式の結果を比較すると、回答者數の比率は後者の方が頗る高まつているが、これはこの種の複雑な性格を持つた問題に對しては、大學程度の教養はあつても、自信をもつて、またその意圖を十分に盡して確信を述べ

強く現われている。その反面、非合法手段に訴える（3.2%）とか、成行に任せる（0.2%）というような變則的、自棄的な行動を戒めていて、青年の考え方が一般に堅實であることの一端を示していると思う。この結果を第一調査のそれと比較してみると、獨立國として外國の隷屬下から解放されたいという願望が國內整備、國力充實よりも優位を占めているのが目立つて

第 16 表 抵 抗 の 方 法

E 抵抗のためにどれを選ぶか。	京大	京大	西京大學		工藝 纖維	計	%
	I	II	男	女			
1 現在のアメリカ勢力の支配に對し自主性を獲得しなければならない。	174	85	6	29	10	304	17.8
2 ソ連圏勢力の支配に對し防衛の準備をしなければならない。	58	26	0	3	3	90	5.2
3 外國による經濟體制の隷屬から解放されなければならない。	152	66	2	9	9	238	13.9
4 外國の文化、行動様式に對し批判的態度を堅持しなければならない。	92	46	5	10	5	158	9.2
5 自國の文化の向上に努めなければならない。	100	57	1	12	10	180	10.5
6 正義と信ずるもののために積極的な闘争を続けなければならない。	105	52	5	5	10	177	10.3
7 そのためには非合法の行動もやむを得ない。	27	27	0	0	2	56	3.2
8 不正なものに對し、非協力の態度をとる修練をしなければならない	85	56	2	6	8	157	9.1
9 國民としての共通目標に對し團結し、互いに裏切ることのないように訓練しなければならない。	60	32	0	12	7	111	6.4
10 戦争に利用されないように徹底的に抵抗しなければならない。	134	67	3	23	9	236	13.2
11 成行にまかせる。	0	3	0	0	0	3	0.2
計	987	517	24	109	73	1710	

F 軍備に伴う危険防止の方法

この結果は、第17表によると、軍人の政治參與の禁止、文官の優位性の堅持など、往年の軍部の陥つた弊に對する警戒心が濃厚に現われ、健全な民主主義を育成し、良識を養つて、失敗を二度とくりかえすまいとの意圖がうかがわれ、また外國への依存態度を捨てようとする獨立への要求も強く出ている。

この結果を第一調査のそれと比較すると、第二調査では問題點が具体的に示してあるためそれらの回答が集中したかたちはあるが、一般的な傾向としては同じである。

第 17 表 軍備に伴う危険防止の方法

F 軍備に伴う危険防止のためにどれを選ぶか。	京大	京大	西京大學		工藝 纖維	計	%
	I	II	男	女			
1 軍人の政治參與を禁止する。	153	72	5	24	11	265	21.5
2 文官の優位性を堅持する。	78	62	3	8	8	159	12.9
3 志願兵制を明文化する。	84	32	4	7	8	135	10.9
4 舊職業軍人を首脳部に入れない。	49	34	1	7	3	94	7.6
5 天皇は軍隊に關係しない。	74	54	0	4	11	143	11.6
6 アメリカの援助政策を拒否する。	91	49	2	18	9	169	13.7
7 國民の自制力を養う。	65	48	調査脱落		0	113	9.2
8 民主主義的訓練を徹底する。	99	52	調査脱落		0	151	12.2
計	693	403	(15)	(68)	50	1229	

共通目標の探求

戦争を場合により肯定するものがその5分の2の28%，絶対に肯定するものは0.5%である。第一調AⅡで同趣旨の質問に答えしめた結果と照合するとき，第二調査では戦争絶対否定の立場をとるものの数が幾分減少し，一方場合によりて肯定するものは増加している。また絶対肯定するものは共に2名である。

解放戦争に対する回答者93名中外國支配からの解放戦争を肯定するもの58名(62%)，支配階級からの解放は35名(38%)となつている。

第14表 戦争に対する態度

C 戦争に対する態度	京大	京大	西京大學		工藝	計	%	
	I	II	男	女	纖維			
1 戦争絶対否定	152	65	7	34	10	268	71.0	
2 戦争を場合により肯定	58	25	3	13	8	107	28.0	
3 戦争絶対肯定	0	1	1	0	0	2	0.5	
計	210	91	11	47	18	377		
解放戦争 {	a 外國支配からの	31	23	1	1	2	58	62.0
	b 支配階級からの	14	18	0	0	3	35	38.0
計	45	41	1	1	5	93		

D 警察と軍備

この結果については第15表に示す通り，警察だけでよいというものが248名(62.4%)で過半数を占め，現在の保安隊だけでよいというものが11.8%，更に増強が必要であるというもの及び将来は必要であるというものが10.8%で，どちらも不要というものは極めて少数である。

第15表 警察と軍備

D 警察と軍備に対してどれを選ぶか。	京大	京大	西京大學		工藝	計	%	
	I	II	男	女	纖維			
1 どちらもいらない。	4	2	0	0	0	6	1.5	
2 警察だけでよい。	137	66	7	27	11	248	62.4	
3 ある程度の軍備が必要 であるとすると。	a 現在の保安隊程度でよい。	28	11	0	6	2	47	11.8
	b 現在でも多すぎる。	5	4	0	1	0	10	4.5
	c 更に増強が必要である。	24	7	2	6	4	43	10.8
4 現在は必要でないが将来は必要である。	23	12	1	4	3	43	10.8	
計	221	102	10	44	20	397		

E 抵抗の方法

抵抗のための手段としては，第16表によると，アメリカよりの支配の脱却(17.8%)，経済体制の隷屬からの解放(13.9%)という自立の要求が顕著に見られ，また戦争にまき込まれることを恐れて，戦争に利用されないように徹底的に抵抗しなければならない(13.2%)という中立論的傾向も強く，そのために國內の整備，國力の充實，就中文化の向上を希求する要望が

次に各項目毎の集計の外に、項目の組合わせについての頻数を求めた(第12表)。それによると、第三勢力の形成、及びアメリカ支配の脱却とソ連支配の防止すると共に行う第三勢力の形成が最も多く、アメリカ及びソ連圏と友好状態を保ちつつ第三勢力を形成しようというもの、アメリカ友好・支配脱却と第三勢力の形成という順になつている。またソ連圏に入ろうとするものは13名に過ぎないが、第11表によると、ソ連圏と友好関係を保とうというものは97名(12%)の多きに上つている。一面的にソ連圏との友好というものが13名、その外、衛星國になろうというもの2名で、大體前のソ連圏に入る数とほぼ合致しているのである。中にはアメリカと友好を結びながら、その支配からの脱却しようとするもの、また同時にソ連圏と友好を結びながら、その支配を防止しようとするもの、アメリカ支配を脱却して、ソ連圏と友好して第三勢力を形成しようとするものが注目され、一般に眞の中立的立場をとろうとするものが多いことがわかる。

B 完全自主への道程

完全自主への道程は、Bで表示したコース以外にもいろいろあるわけで、これをまとめたのが第13表である。すなわち、第三勢力の形成が圧倒的に多い。またアメリカ勢力を排除して、ソ連圏に入りたいというものは僅少である。しかしこの結果が果して全體の學生の動向を十分にあらわしているかどうかは疑問であるが、Bの結果とAの結果を照合する時兩者の數字に一貫性のあることは肯けるのであろう。

第 13 表 完全自主への道程

	京大 I	京大 II	西京 男	大學 女	工藝 纖維	計	%
(1)→(2)→(8)	29	27	1	26	5	88	22.0
(1)→(3)→(8)	21	12	3	9	1	46	12.0
(1)→(3)→(4)→(8)	68	18	3	10	9	108	27.0
(1)→(3)→(4)→(5)→(8)	89	34	4	0	5	132	33.0
(1)→(3)→(6)→(8)	0	1	0	0	0	1	0.3
(1)→(3)→(6)→(7)→(8)	2	6	0	0	0	8	2.0
(1)→(3)→(4)→(5)→(6)→(8)	4	0	0	0	0	4	1.0
(1)→(2)→(4)→(8)	2	0	0	0	0	2	0.5
(1)→(2)→(5)→(8)	0	1	0	0	0	1	0.3
(1)→(3)→(5)→(8)	3	0	0	0	0	3	0.8
(1)→(3)→(7)→(8)	2	0	0	0	0	2	0.5
(1)→(5)→(8)	4	0	0	0	0	4	1.0
計	224	99	11	45	20	399	

註 左欄の番號は第2表参照

C 戦争に対する態度

この結果は、第14表に示す通り戦争を絶対に否定するものが圧倒的に多く、71%を占め、

共通目標の探求

ない國に貿易の發達した例はない。映畫ニ第三の男ニの中の名セリフにあつたが、「スイスは五百年にわたるデモクラシーと平和という、そして何が生れたか——鳩時計一つだけではないか」という言葉においても見られる。軍備は絶対に必要である。大なる軍備をもつアメリカは民主主義の國ではないか。

(二) 第二調査

然一調査の結果を整理集約し、それに依つて作成した第二調査による調査の結果は次の通りである。

A 對外國關係

第一調査Bにおいて、第三勢力の形成への意欲がはつきりうかがわれたのであるが、それが第二調査で全面的に明確になつた。第11表に示す通り、第三勢力の形成が一番多く、それに

第11表 對外國關係

A 對外國關係としてどれを選ぶべきか。		京大	京大	西京大	大學	工藝	計	%
		I	II	男	女	纖維		
1	アメリカとの友好關係を保持する。(+A)	74	36	1	16	11	138	17.0
2	ソ連圏との友好關係を保持する。(+R)	58	26	0	4	9	97	12.0
3	アメリカによる支配から脱却する。(-A)	143	53	3	18	12	229	28.0
4	ソ連圏による支配の防止に努める。(-R)	67	21	0	4	3	95	12.0
5	第三勢力を形成する。(T)	165	50	8	9	16	248	30.0
6	アメリカの保護下に存続する。(++A)	2	2	0	0	0	4	0.5
7	ソ連の衛星國となる。(++R)	1	1	0	0	0	2	0.3
計		510	189	12	51	51	813	

第12表 對外國關係の組合せ

アメリカ支配からの脱却が次ぎ、アメリカとの友好關係を保持しようというものは半數近くに減じ、ソ連圏との友好關係の保持、これと反對にソ連圏による支配の防止の順となつていて、アメリカの保護下に存続する、ソ連の衛星國となるというものは4名と2名で僅少である。

西京大學女子の場合ではアメリカとの友好關係の保持と支配脱却とが略同數であることをみると、男子の場合との顯著な差異がうかがわれるようである。

A	R	N	%	A	T	R	N	%			
++	-	2	{ 1 0.6 } { 0.3 }	+	+	-	28	8.8			
++	-	1	{ 0.3 }	+	+	-			11	3.2	
+	-	17	{ 2 4.9 } { 0.6 }	±	+	-			12	3.5	
+	-	15	{ 4.3 }	+	+	±	4	1.2			
±	-	10	{ 5 2.8 } { 1.4 }	±	+	-	8	2.4			
±	-			1	{ 0.3 }	+			-	7	2.1
+	+	32	{ 12 3.5 } { 1.4 }	-	+	-	139	40.8			
±	±			5	{ 1.4 }	+			+	57	17.0
-	-			15	{ 4.3 }	+			+	+	42
-	-	20	{ 19 5.9 } { 0.3 }	±	+	±	54	54			
-	±			1	{ 0.3 }	±			±	21	6.2
±	+	6	1.7	-	+	+	8	2.3			
-	+	13	{ 1 3.8 } { 3.5 }	+	+	+			3	0.9	
-	+			12	{ 3.5 }	-	+	+	5	1.4	
++	++	2	0.6	合計			339				

註 +, -については第11表参照

裁である。これは國民が民主主義の精神を強持して、民主政治の上に立つあく迄も自衛のためのものとして絶えず注意していなければならぬ。それには國民の政治的關心を強くしなければならず外部からの勢力に對しては、國際關係において極力、外國との摩擦をさけること、獨立心を昂揚して、國際狀勢に對し明晰な判斷を下すこと、教育においては民主主義精神の徹底をはかることが大切である。

◦民主的軍隊型（男子）

まず、現在の保安隊ならば、その幹部の文官優位の堅持、軍隊内での階級制度を努めて少なくすること、思想的なバックボーンはあくまでも純粹な意味での愛國心と、文字通りの平和をまもることである。

◦反省型（男子）

再軍備による危険性も十分考えられるが、その危険は、過去の失敗を知ることによつて防止できると思う。過去の軍隊のすべてが悪いのではないが、もつと民衆の上の軍隊であることを忘れてはならない。又過去の日本の思い上つた態度は捨ててしまわなければならない。

◦政治優先型（男子）

軍備のもつ危険性とは、すなわち侵略戦争その他への介入のことである。これを防止するためには、軍人に政治面への進出を阻止し、且つ戦争は得しないという思想教育を徹底的にし、その慘禍のひどさを頭にしみ込ませなければならない。軍隊は要するに政治の實權から完全に離れたものとし、政治面への壓力を防止し、そして三權分立の行きとどいた、民主的な政府が打ち建てられたならば、完全にその危険性は除かれるであろう。

◦（男子）

軍隊とは他國を侵略するものでなく、自衛のためにのみ使用すべきものであることを根本的に國民に徹底させる。特に軍人には、この思想を教化し、從來の血氣にはやつた好戰的氣質から、忍耐力のある、持久的な氣質へと轉換せしめる。

方法としては徴兵制によらずして志願兵制をとること、司法、行政、立法の三權と兵馬の權の關係をはつきりしておくことが必要である。

◦解放軍型（男子）

〔方法〕 下層階級出身の兵士に、自身の立場をはつきり自覺せしめるよう常に外部からコミュニケーションをし啓蒙につとめる。

〔準備〕 勞働者農民の階級意識を高め、軍隊をして、獨占資本の走狗たらしめないよう準備する。

◦國內對應型（男子）

軍備は本土自衛にのみ必要で、全然侵略の意志なき、又は力なき軍隊を作る。その軍隊はよく訓練されたものでなければならない。從來の日本軍は、専ら外國で戦争をしたが、今度は内地のみという前提であるから、愛國心をかき立て、十分な力を出して抵抗できると思う。この程度なら他の國々（自由主義國）も黙つているだろうし、ソ連としても表面的に對日侵略を始めるとは思えない。むしろ軍備の問題を餌とする共産細胞の活躍による。内部的崩壊に十分注意する必要がある。

◦ウルトラ・ミリタリズム型（男子）

軍備のもつ危険性を考えることはできない。世界中軍備を持つていない國はどこにもない。軍備の

共通目標の探求

(男子)

ガンジーズムで行く。まず人間性そのものについてよく研究すること。教育態度を變えて、覺えることより考えること。個人の力を自覺させるようにすること。根本的解決への努力として經濟組織の改革への努力、民主主義維持の努力を失わないようにする。

◦**第三勢力型**(男子)

侵略を防ぐことは、日本の現力では全く不可能である。米ソどちらかの武力にたより、どちらかの侵略に對向するのが武力による抵抗と考えられるがここに第三勢力という一つの力がある。武力はなくても、これは經濟力、政治力をもっている。この勢力に加入する。そして日本を侵略することが大きな見地からすればその侵略國の利益にならないことを知らしめることによつて、これを阻止できると考える。

◦**抵抗推進型**(男子)

現状において軍備をすることは國民の經濟生活を破壊することでもある。又外國軍隊の強力な侵略、特に新科學兵器によるものに對しては殆んど無力といつて良い程で、我々はそれにはただ無抵抗のみが残るにすぎない。しかし一見無力に思われるそれも軍備の效果なき現状にあつての唯一の武器たるべきものであると思う。方法はやはりゲリラ戰術などの無抵抗中強力なものをとるべきでいたずらに他國民への同情をかうだけのものであつてはならない。

(男子)

侵略軍への物資供給の消極的拒否を行い、知識人の總動員によるレジスタンス運動を組織する。しかし知識人は意志力の弱いのが通弊であるから、愛郷心による各地方民の抵抗の指導による間接的抵抗をなす。とにかく侵略軍の居心地の悪い状態にすることが第一條件である。

(男子)

精神的な面においては宣傳、報導等により抵抗する。經濟的な面においては、ストライキ等により抵抗する。

◦**階級解放型**(男子)

平和と自由という崇高な理念の裏づけとして特に政治的に戦争を見た場合、階級性にめざめること、つまり大衆の一人であると根強く自覺することによつて、更に世界の大家、人民は決して戦を望むものでないことを、そしてそれが自らに決して平和な豊かな生活をもたらすものでないことを自覺することによつて、根強いレジスタンスの精神が生ずるのでないかと思う。他の同じ要素は民族的意識を明確にしかつ誇りをもつことである。

◦**革命謳歌型**(男子)

共產軍の侵入の場合はこれを利用して現存勢力を破壊すべきだ。この場合における我々の側の多少の犠牲はそれが成功した暁にはつくなわれると思う。

二 軍備に伴う危険性の防止方策

◦**民主主型精神昂揚型**(女子)

自衛のための武力は憲法でもみとめているのは當然で、憲法の根本精神は、ますます強調されねばならぬ。軍備をもつ危険性は外からよりまず内部から起る。すなわち全體主義、軍國主義、軍人の獨

が當然である。それ故、まず人々がしつかり團結して平和をあくまで守り通す決意を持つことが武力以外の最も大きな抵抗となる。人間の良識、善なるものを信頼する以外に方法はない。

○人道主義型（男子）

マハトマ・ガンジーの如き愛の精神による祕やかな、力強い抵抗による必要がある。ゲリラ的抵抗は相手を惱ませるかも知れぬが、相手に反省を求めることはできない。宗教的愛の教育によつて國民を養成し、戦争防止の原動力とならねばならぬ。

○永世中立型（男子）

現在の日本の國力並びに經濟狀態では再軍備は不可能であり、又たとえ形式的な軍備をもつてもかえつて相手國の侵略を誘發する。又他國の援助を受けた軍備をもつことも、それによつて、大國のいずれかの陣營に入り、はつきりした敵對行爲となる。又國連の集團安全保障を受けることは、これまた代償として國連軍の編成メンバーを提出することになつて再軍備となる。故に結論として、平和を愛好する新日本國憲法の趣旨にそつて全く軍備をもたず國連にも加入せず、絶對永世中立を世界に宣言して各國の道徳的な立場を信頼するより良い方法はない。

○外交力依存型（男子）

わが國の再軍備はとうてい現在の國民生活水準ではたえ得ないことを指摘しなければならない。たとえ、今、國民生活を混亂におとし入れてまで軍備をしても、決して本格的侵略に對抗し得ないのみならず、相手の交戦心を刺激して、事態をより擴大するのみである。ここに無抵抗の抵抗があらわれて來ると思う。すなわち我々はこれを國際連合による集團安全保障調停に見出したい。我々は崇高な人類の理想にもとづき、UNをつくり上げたのであり、過去の幾多の業績より考えて、これが不可能とは考えられない。國連憲章のうたうあの精神に則り、國際紛争を平和的に解決しなければならない。

○國內整備型（男子）

文化の向上と、その基となる經濟の安定、國民生活の向上をはからねばならぬ。軍備は經濟を安定させるためには必ずしも必要でなく、逆作用すらある。もし軍隊をもつても國民の文化レベルが低ければ再び軍國主義となり、外的壓力よりむしろ自ら自らを壓迫するに至る。國民文化の礎なしの軍隊は獨専的勢力になるだけである。このために軍隊ではなくて、文化向上、經濟安定、生活向上等の手段を害する團體その他を壓するだけの警察で十分である。

（男子）

完全な民主主義の發展を促すような方法、すなわちそれは教育によらねばならぬ。先ず個人の自覺を日本人に持たせるような教育が行われなければならない。批判精神から個人の自覺は生れる。個人の自覺から更に民族の自覺へと進まねばならぬ。

（男子）

先ず多數のものが一致結束しなければならない。これには民族意識を高め、現實の狀態に對する深い理解がなければならない。農民の啓蒙が必要である。しかしながら、民族意識などはそれを高めなければならないから高めようと言つてそう簡単に高まるものではないのであつてこのようなことは日本人が自らの土壤から高い民族文化を創造し、それによつて共通の意識を自覺するのであつて、文化とか、思想をもたない抵抗は無意味に等しい。何よりも要求されるものは國民文化の創造である。

共通目標の探求

第 10 表 軍備が持つ危険性を救う方法

	京大	京大	西京大		工	計	%
	I	II	男	女	藝		
1 軍人の政治參與を禁止する。	10	5	0	0	0	15	11.5
2 文官の優位性を堅持する。	11	3	0	0	0	14	10.7
3 軍隊の不當な擴張を防ぐ（豫算，天皇制，志願兵制など）	4	15	0	0	1	20	15.3
4 自衛軍備であることの認識を徹底する。	1	1	0	3	0	5	3.7
5 軍人の素質を向上する。	3	0	0	3	1	7	5.4
6 世界的國家軍へと發展せしめる。	1	2	0	0	0	3	2.3
7 アメリカ依存の態度を脱却する。	3	5	1	0	1	10	7.6
8 國民に健全な思想を育成する。	10	2	3	4	2	21	16.1
9 文化を向上せしめる。	1	1	2	0	4	8	6.1
10 生活を安定させる。	0	0	0	3	0	3	2.3
11 帝國的な考え方を根絶する。	1	1	0	2	0	4	3.0
12 平和的な政府を樹立する。	0	3	1	2	0	6	4.2
13 社會改革をする。	2	1	1	0	0	4	3.0
14 危険性はない。	0	0	1	0	0	1	0.7
15 不可能である。	3	3	3	0	1	10	7.6
計	50	42	12	17	10	131	

危険性を救うために必要な準備

	京大	京大	西京大		工	計	%
	I	II	男	女	藝		
1 民主主義教育を徹底する。	2	3	5	2	1	13	59.0
2 正惡の認識を深める。	3	0	0	2	1	6	27.2
3 社會主義的教育をなす。	1	1	1	0	0	3	13.6
計	6	4	6	4	2	22	

○大陸型（男子）

占領されれば、表面上その支配に従い、支配者が變れば、又それに従えばよからう。中國人を見習うがよい。たとえどの國がやつて來ようとも、中世紀のような支配の仕方では、どうにもならないことを知らないものはないであろう。要するにわれわれは、憲法の前文にあるように、世界の人々の良心を信頼すべきである。

○現實體驗型（女子）

ただ世界各國の理解という夢のようなことしかいわれない。しかしあくまで軍備反對をする理由は、戦争による損害を直接うけたための切實な叫びである。今度軍備ができれば青年が徴兵されるのである。こうして私達から兄や戀人をうばい再びあのモンペ姿の苦しみを味わうくらいなら……私は無抵抗を主張したい。感情的だといわれるかも知れないが眞實に心の底から戦争をにくむが故で、女性の心からの叫びなのである。

○平和決意型（女子）

武力に對して武力でむくいることは、人間性を惨虐にする。戦争というものは、人間がひきおこすものである以上、人間によつてまた絶やすことができるはずである。それ故、人間の心が問題となる。すべての人が眞に平和を望み、いかに生くべきかの目的をはつきりつかむならば、戦争は起らないの

第 9 表 武力以外の抵抗方法

	京大	京大	西京大學		工藝	計	%
	I	II	男	女	纖維		
1 非合法でもよいからあらゆる手段で抵抗する。	7	7	1	1	1	17	7.5
2 文化手段で抵抗する。	11	4	0	1	3	19	8.4
3 侵略國の政策に協力しないで抵抗する。	9	4	0	0	0	13	5.6
4 平和の希求のために抵抗する。	2	6	0	1	0	9	4.0
5 まず國內の整備をし、國力を充實する。{文化・經濟・力など}	14	7	11	8	7	47	21.3
6 社會改革（社會主義化，階級解放）を主とする。	11	6	0	0	1	18	8.0
7 平和的な政府の樹立をはかる。	0	2	0	5	0	7	3.1
8 對外活動（國際連合，集團保障，第三勢力，國際理解，世界國家の構想などを積極化する。	6	6	2	6	5	25	11.1
9 平和的立場を内外に明らかにする。	8	6	0	7	3	24	10.2
10 中立ですすむ。	0	1	2	0	2	5	2.2
11 解放軍の場合は積極的に迎える。	3	2	0	0	0	5	2.2
12 徹底的に無抵抗で出る。	9	4	2	7	0	22	9.6
13 日和見主義で進む。	6	1	0	0	0	7	3.1
14 どんな抵抗も不可能である。	2	2	0	3	0	7	3.1
計	88	58	18	39	22	225	

抵抗のために必要な準備

	京大	京大	西京大學		工藝	計	%
	I	II	男	女	纖維		
1 平和，國際理解の教育につとめる。	1	9	5	12	0	27	45.0
2 民主主義教育を徹底する。	2	2	1	2	0	7	11.7
3 文化政策を主とする。	2	3	3	4	1	13	21.7
4 團結心を養い，侵略に動じない教育を施す。	0	3	2	2	1	8	13.3
5 社會主義の精神を養う。	0	2	1	0	2	5	8.3
計	5	19	12	20	4	60	

調査の對象となつた青年たちは、その生育期のすべてをみじめにふみじられた犠牲者である。軍隊に對する呪咀があつてもそれは當然であらう。しかし彼等は謙虛に健全な思想の育成によつてその失敗をくりかえすまいとする。また制度的にも、あらゆる方面から検討を加えて往年のわが國軍部の陥つた轍を二度とふむまいとしていることがうかがわれる（第10表）。

そのための準備として、民主主義教育の徹底など健全な國民精神を養うことにつとめることを擧げているのは前節の抵抗のための準備と同じ氣持で、共に國の將來に眞劔に思いをこめての共通の歸結であるといえよう（第10表）。

自由記入の類型

一 武力以外の抵抗（無抵抗の抵抗）の方法

○成りゆき任せ型（男子）

不合理なものは究極においては破綻を來たす、という考えに立つものであるから、その意味においては成りゆきにまかせる立場をとる。しかし人々をして不合理、合理を見わけせしめ得るよう啓蒙に努力する。

共通目標の探求

4 軍備は國民の經濟生活を	$\left\{ \begin{array}{l} \text{a 必ずしも破壊しない。} \\ \text{b 多少の破壊は止むを得ない。} \\ \text{c 軍需産業によつて豊かにする。} \end{array} \right.$	2	1	0	1	2	6	2.6
		9	7	3	7	4	30	13.3
		0	0	1	0	0	1	0.4
		2	0	1	0	0	3	1.3
不 明								
5 民主主義の破壊は…	$\left\{ \begin{array}{l} \text{a 當然である。} \\ \text{b 止むを得ない。} \\ \text{c 防止することができる。} \\ \text{d 起らない。} \end{array} \right.$	0	1	0	0	0	1	0.4
		0	1	0	0	0	1	0.4
		10	3	2	5	4	25	11.1
		1	2	1	1	2	7	3.1
不 明		1	0	1	1	0	3	1.3
6 個人の生活の犠牲は	$\left\{ \begin{array}{l} \text{a 國家の危機においては當然である。} \\ \text{b 全體の幸福のためには止むを得ない。} \\ \text{c 崇高なる社會道徳を育成するに役立つ。} \end{array} \right.$	6	2	2	3	2	15	6.6
		5	4	2	3	4	18	8.0
		0	0	0	0	0	0	0
		2	0	1	1	0	4	1.7
不 明								
計		78	42	26	43	36	225	

東亞諸民族に迷惑をかけた直後でもあり、多少の悪刺激は止むを得ないので、日本の信頼性を増すものとは毛頭考えていないが、對内的には、民主主義が軍備によつて破壊されるところとかぎらず、防止できるという見解が殆んどである。國民の經濟生活を多少破壊することはあつても甘受すべきであるという考えが強く、個人の生活の犠牲は全體の幸福のためには止むを得ないこととあり、國家の危機に際し、當然のこととして對處すべきであるというのであるが、さすがに個人の犠牲を直ちに社會の美德に直結させるような往年の考え方は全然現われてはいない。

○自由記入様式

(イ) 武力以外の抵抗（無抵抗の抵抗）の方法及びその準備

他國の侵略、しつこくの下においては一國の獨立の名において自ら獨自の抵抗の方途も生まれてくるわけである。第9表に現われたところによると、被調査者は望みを將來に托して、まず文化的な地力を養い、經濟力を蓄積するなど、國內の整備、國力の充實を先決とし、基盤を培いたいとの意向が最も熾烈な要望となつて現われている。そして憲法の精神に則り、平和的立場を内外にせん明すると共に、國際連合、集團保障、國際理解の諸方策によつて自衛の處置を講ずるとか、第三勢力の形成、世界國家の構想など對外活動を積極的に遂行しようとの意圖が強く、またフランス流の「レジスタンス」から非合法的抵抗の肯定、ガンジーの無抵抗主義など青年の理想主義と積極性が端的にみられる。

では抵抗のために如何なる準備をなすべきかというに、平和、國際理解の教育、民主主義の教育を徹底し、文化政策を積極的に推進し、團結心を養うというのが多い。

(ロ) 軍備に伴う危険性を防止する方法及びその準備

軍備の持つ危険性。追憶は余りにも生々しく傷手の苦痛をよみがえらせる。とりわけこの

2 内亂は……………	a 起るとは思われない。	18	3	3	10	4	38	3.9
	b 起るべきである。	5	2	1	0	1	9	0.9
	c 警察で十分である。	61	42	12	28	9	159	15.5
	d 警察以上の力を要す。	2	2	0	2	0	6	0.6
	e 如何なる防衛もだめである。	1	0	0	1	1	3	0.3
不 明		4	1	0	6	1	12	1.2
3 軍隊を持つことは	a 獨立國家として、必ずしも必要でない。	43	18	7	14	4	86	8.6
	b 憲法違反である。	20	21	1	30	7	79	7.1
	c 新生日本の崇高なる理想を放棄するものである。	50	29	7	19	8	113	11.6
不 明		2	0	0	1	0	3	0.3
4 對外折衝において武力を利用することは	a 必要でない。	18	8	4	15	3	48	4.9
	b 道徳的にいつて根本的な誤謬である。	50	22	3	14	6	95	9.7
	c 侵略戦争を誘起する。	36	29	7	30	8	110	11.3
不 明		0	0	1	1	1	3	0.3
計		398	221	61	216	70	972	

そして武力を對外折衝の具に供することは、侵略戦争を誘起するものであり、また道徳的にいつて許すべからざるものとの見解が強い。

ロ、軍備必要

イと反対に、軍備必要の立場をとる場合の盲點を衝いたのがこのロの調査である。その結果は（第8表）、少々の軍備で本格的侵略は防止できないとしても、相當の抵抗は可能であるとし、戦争誘発ないし介入の危険性はたしかにあるが、防止することもできるし、もしそれがあつても止むを得ないことであるとする。また軍備は對外的に太平洋戦争で

第 8 表 軍備必要側の辨

C		京大 I	京大 II	西大 男	西大 女	工藝 繊維	計	%
ロ 軍備必要								
1 本格的…侵略は	a 防止することができる。	0	1	2	1	0	4	1.7
	b 防止することができなくても相當の抵抗ができる。	10	4	0	4	5	23	10.2
	c 考えられない。	1	0	0	1	1	3	1.3
	d なんとも仕方がない。	1	2	1	1	0	5	2.2
不 明		2	0	1	0	0	3	1.3
2 戦争誘発ないし介入の危険性は	a 考えられない。	1	0	0	0	0	1	0.4
	b 減ずる。	2	0	2	1	1	6	2.6
	c 考えられるが止むを得ない。	4	1	1	3	1	10	4.4
	d 考えられるが防止することができる。	5	5	1	3	4	18	8.0
不 明		1	0	1	0	0	2	0.9
3 東亞諸民族に對し	a 悪い刺激は考えられない。	0	2	1	1	2	6	2.7
	b 多少の悪刺激は止むを得ない。	11	5	1	5	4	26	11.5
	c 日本に對する信頼性を増す。	0	0	0	0	0	0	0
不 明		2	1	2	1	0	6	2.6

共通目標の探求

る。この結果によると(第5表)、現在の世界情勢下、弱體のわが國としては完全獨立は困難であり、第三勢力の形成への希求が強く現われている。

C 軍備反對と必要

あるいは軍備反對を呼號し、あるいは必要を力説する。この調査では被調査者の全部に近いものが大學のジュニヤークースの若き青年男女である。ほとんどの彼らは軍備反對の立場をとる(第6表)。

イ、軍備反對

軍備反對論の盲點を衝き、その立場をとる人々に自ら検討せしめたのがこの調査である。それによると(第7表)、外國の共產勢力の侵略は脆弱な軍隊の追いつくところでないとして、軍備以外の抵抗方法を擧げている。また内亂に對しては、警察だけで結構というのである。一方軍隊を持つたら、新生日本のせつかく掲げた崇高な理想の放棄であり、憲法違反であつて、獨立國家なるが故に軍隊を持たねばならないという理くつはないという。

第5表 完全獨立と對外關係

B		京大	京大	西京大學		工藝	計	%
		I	II	男	女	纖維		
1	日本の完全獨立は、アメリカ圏内においてのみ可能である。	(6)	0	1	6	1	14	5.2
2	日本の完全獨立は、ソ連圏内に入つてのみ可能である。	2	3	0	0	0	5	1.9
3	日本の完全獨立は、第三勢力によつてのみ可能である。	49	33	10	20	10	122	45.5
4	現在の世界情勢においては、日本の如き弱小國の完全獨立は不可能である。	47	22	6	21	11	107	39.9
5	永世中立	2	2	0	3	0	7	2.6
	不明	2	2	2	7	0	13	4.9
	計	108	62	19	57	22	268	

第6表 軍備反對と必要

	京大	京大	西京大學		工藝	計	%	
	I	II	男	女	纖維			
1 軍備反對	77	44	15	44	11	191	84.5	
2 軍備必要	11	4	4	5	5	29	12.3	
3 分けられない	0	0	0	0	0	2	0.9	
不明	3	1	0	0	0	4	1.8	
	計	91	49	19	51	16	226	

第7表 軍備反對側の辨

C		京大	京大	西京大學		工藝	計	%				
		I	II	男	女	纖維						
	イ 軍備反對											
1	外國の共產勢力の侵略は	a 考えられない。本格的な攻撃であれば通常の軍備では防止することはできないから、軍備は無用である。	b	(1) 軍備以外の方法で抵抗する。	20	10	2	3	4	39	4.0	
					(2) 無抵抗で成り行きにまかせる。	56	36	11	36	10	149	15.3
					11	4	1	3	2	21	2.1	
	不明	1	0	1	3	1	6	0.6				

七 調査の整理（項目別の分析）

(一) 第一調査

質問紙法

A (I) 戦争の可避、不可避と態度

戦争の可避、不可避及びそれに伴う態度の調査である。その結果によると（第3表）、戦争は避けることができないが、その防止にはわれわれも關與できるので、全力を傾倒しなければならぬという意見が多数を占めている。

A (II) 戦争は是か非か

戦争を肯定するか、否定するかの方針の調査である。本調査の結果によると（第4表）、戦争を絶対に否定するという立場のものが圧倒的に多い。これに比し、ある種の戦争はこれを肯定しなければならぬとしたもののうち、資本主義の運命として當然宿命的なものとしているものがかなり多い。一方、戦争を一切の發展の母として絶対視するものはただ二名に過ぎない。青年はあくまで戦争を拒否している。

B 完全獨立と對外關係

わが國が完全獨立を保持するためには、對外的に如何なる立場をとるべきかの調査であ

第 3 表 戦争の可避・不可避の態度

A I	京大 I (宇治 分校)	京大 II (吉田 分校)	西京大學		工藝 纖維	計	%
			男	女			
1 戦争は避けることできない。したがって成り行きにまかせるより仕方がない。	1	0	0	1	1	3	1.1
2 戦争は避けることができないが、その防止には最後まで努力しなければならない。	27	8	3	12	3	53	20.5
3 戦争は避けることができない。したがってこれを積極的に利用しなければならない。	1	0	0	1	0	2	0.7
4 戦争は避けることができないが、日本はその局外に立つように最大の努力を拂わねばならない。	13	14	3	10	4	44	17.0
5 世界の人々の努力によつて、戦争は避けることができる。しかし我々は戦争防止に對しては全く無力である。	12	4	2	6	7	31	12.0
6 我々も戦争防止のために關與する事ができる。したがってそのために戦争防止に全力を注がねばならない。	51	33	11	2	7	123	47.6
不 明	0	0	1	11	0	2	0.7
計	105	59	20	52	22	258	

第 4 表 戦争は是か非か

A II	京大 I	京大 II	西京大學		工藝 纖維	計	%
			男	女			
a 戦争は理由の如何を問わず絶対に否定されるべきである。	89	45	14	38	15	201	80.7
b ある種の戦争はこれを肯定しなければならない。	8	11	2	12	7	40	16.0
c 戦争は一切の發展の母である。	1	0	1	0	0	2	0.8
不 明	2	0	2	2	0	6	2.4
計	100	56	19	52	22	249	

共通目標の探求

適切と思うもの幾つかを選ばせ、(B) 完全自主への道程を六つ擧げてその一つを選ばせ、(C) 戦争に対する態度を五つ、(D) 警察と軍備についての所見を六つ擧げて、それぞれについて一つを、(E) 抵抗、(F) 軍備に伴う危険の防止などについて、幾つかの項目を撰擇させたものである。

五 調査実施期

昭和二十七年九一十月

六 調査対象

第一調査

京都大學宇治分校（教養一回生）——京大Ⅰ

男子 103 名

同 吉田分校（教養二回生）——京大Ⅱ

男子 57 名

西京大學農學部，文家政學部（主として教養二回生）

男子 19 名

女子 52 名

京都工藝纖維大學

男子 21 名

女子 1 名

合計 男子 200 名

女子 53 名

第二調査

京都大學宇治分校 男子 224 名

同 吉田分校 男子 99 名

西京大學農學部，文家政學部 男子 11 名

女子 46 名

京都工藝纖維大學 男子 20 名

合計 男子 339 名

女子 46 名

この調査の目的から、第一調査、第二調査の被調査者は殆んど重複している。

また右の中、各項目にわたつて回答のあいまいなものは除外して整理した。

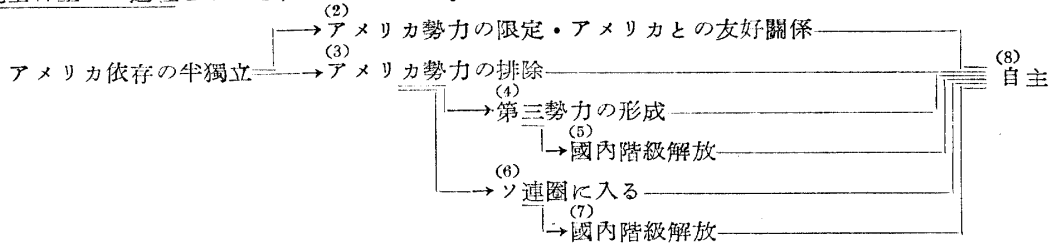
さらに軍備反対論者の一つの中心課題となる「武力以外の抵抗（無抵抗の抵抗）の方法及びその準備」と、軍備必要論者の「軍備に伴う危険性の防止方策及びその準備」について自由な所見を記述させた。第一調査の質問を集約検証せしめるような作製したのが第二調査用紙（第2表）である。第二調査の主な項目は、（A）對外國關係として七つの方途を擧げて、その中

第 2 表 第 二 調 査 表

A 對外國關係としてどれを選ぶべきか。

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1 アメリカとの友好關係を保持する。 | 5 第三勢力を形成する。 |
| 2 ソ連圏との友好關係を保持する。 | 6 アメリカの保護下に存続する。 |
| 3 アメリカによる支配から脱却する。 | 7 ソ連の衛星國となる。 |
| 4 ソ連圏による支配の防止に努める。 | |

B 完全自主への道程としてどれを選ぶべきか。



C 戦争に対する態度としてどれを選ぶか。

- | | |
|---------------|---------------------------------|
| 1 戦争絶対否定。 | 4 解放戦争 { a 外國支配からの
b 支配階級からの |
| 2 戦争を場合により肯定。 | |
| 3 戦争絶対肯定。 | |

D 警察と軍備に対してどれを選ぶか。

- | | |
|----------------------|--|
| 1 どちらもいらない。 | a 現在の保安隊程度でよい。
b 現在でも多すぎる。
c 更に増強が必要である。 |
| 2 警察だけでよい。 | |
| 3 ある程度の軍備が必要であるとすると | |
| 4 現在は必要でないが将来は必要である。 | |

E 抵抗のためにどれを選ぶか。

- 1 現在のアメリカ勢力の支配に對し自主性を獲得しなければならない。
- 2 ソ連圏内の支配に對し防衛の準備をしなければならない。
- 3 外國による經濟體制の隸屬から解放されなければならない。
- 4 各國の文化・行動様式に對し批判的態度を堅持しなければならない。
- 5 自國の文化の向上に努めなければならない。
- 6 正義と信ずるもののために積極的な闘争を續けなければならない。
- 7 そのためには非合法の行動もやむを得ない。
- 8 不正なものに對し非協力の態度をとる修練をしなければならない。
- 9 國民としての共通目標に對し團結し、互いに裏切ることのないように訓練しなければならない。
- 10 戦争に利用されないように徹底的に抵抗しなければならない。
- 11 成行きにまかせる。

F 軍備に伴う危険防止のためにどれを選ぶか。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 軍人の政治參與を禁止する。 | 5 天皇は軍隊に關係しない。 |
| 2 文官の優位を堅持する。 | 6 アメリカの援助政策を拒否する。 |
| 3 志願兵制を明文化する。 | 7 國民の自制力を養う。 |
| 4 舊職業軍人を首腦部に入れない。 | 8 民主主義的訓練を徹底する。 |

共通目標の探求

第1表 第一調査表

- A
- 1 戦争は避けることができない。したがって成り行きにまかせるより仕方がない。
 - 2 戦争は避けることができないが、その防止には最後まで努力しなければならない。
 - 3 戦争は避けることができない。したがってこれを積極的に利用しなければならない。
 - 4 戦争は避けることができないが、日本はその局外に立つように最大の努力を拂わねばならない。
 - 5 世界の人々の努力によつて、戦争は避けることができる。しかし我々は戦争防止に對しては全く無力である。
 - 6 我々も戦争防止のために寄與することができる。したがつてそのために、戦争防止に全力を注がねばならない。

-
- a 戦争は理由の如何を問わず絶対に否定されるべきである。
 - b ある種の戦争はこれを肯定しなければならない。
 - c 戦争は一切の發展の母である。

- B
- 1 日本の完全獨立は、アメリカ圏内においてのみ可能である。
 - 2 日本の完全獨立は、ソ連圏内に入つてのみ可能である。
 - 3 日本の完全獨立は、第三勢力の形成によつてのみ可能である。
 - 4 現在の世界勢力においては、日本の如き弱小國の完全獨立は不可能である。

C イ. 軍備反對

- 1 外國の共産勢力の侵略は

{	a 考えられない。 b 本格的な攻撃であれば通常の軍備では防止することはできないから、軍備は無用である。したがつてその時には、 (1) 軍備以外の方法で抵抗する。 (2) 無抵抗で成り行きにまかせる。
---	---
- 2 内亂は……………

{	a 起るとは思われない。 b 警察で十分である。
---	-----------------------------
- 3 軍隊を持つことは……………

{	a 獨立國家として、必ずしも必要でない。 b 憲法違反である。 c 新生日本の崇高なる理想を放棄するものである。
---	--
- 4 對外折衝において武力を利用することは

{	a 必要でない。 b 道徳的にいつて根本的な誤謬である。 c 侵略戦争を誘起する。
---	---

ロ. 軍備必要

- 1 本格的侵略は……………

{	a 防止することができる。 b 防止することができなくても相當の抵抗ができる。 c 考えられない。 d なんとも仕方がない。
---	---
- 2 戦争誘發ないし介入の危険性は

{	a 考えられない。 b 減ずる。 c 考えられるが止むを得ない。 d 考えられるが防止することができる。
---	---
- 3 東亞諸民族に對し……………

{	a 悪い刺激は考えられない。 b 多少の悪刺激は止むを得ない。 c 日本に對する信頼性を増す。
---	---
- 4 軍備は國民の經濟生活を

{	a 必ずしも破壊しない。 b 多少の破壊は止むを得ない。 c 軍需産業によつて豊かにする。
---	---
- 5 民主主義の破壊は……………

{	a 當然である。 b 止むを得ない。 c 防止することができる。 d 起らない。
---	---
- 6 個人の生活の犠牲は……………

{	a 國家の危機においては當然である。 b 全體の幸福のためには止むを得ない。 c 崇高なる社會道徳を育成するに役立つ。
---	---

他國軍隊の進駐下におけるしつこくに對しては武力によらない抵抗、いわゆる無抵抗の抵抗は必要であると考え、軍備を必要とする人々も軍備に伴いやすい諸種の危険性に對しては、極力防止しなければならないと考える。またこれと交錯して、軍備反對の人々も現實に進行する軍備については、上の考慮が必要であり、軍備必要とみる人々も單なる外面的な軍備に止まらず、精神的な抵抗力を養うことも缺くべからざるものであると考えるであろう。このように辿つてくれば、この對立する立場の間に共通の領域、共通の目標が見出されてくるのではあるまいか。

- (4) 更に抵抗力といい、軍備に伴う危険性の防止というとき、一面社會組織の整備なども肝要であるが、他方これに關する人格の鍛練もこれに劣らず必要であつて、そのような人格の特徴として自律性や弾力性などの共通するものが、かなり見出されると考えられる。

三 方 法

從來あるグループの人々の實態について調査がなされたが、それは調査のための調査に終りがちで、有意義性から、またその活用性から、甚だ形式的なものが多かつたように思う。現われた結果を調査者ではつきりさせると共に、被調査者自身にも知らせ、さらにその思索を發展させることは、その自覺を深める上にも極めて有用であると考えられる。これはグループダイナミックス(Group Dynamics)でいわれるフィードバック(Feedback)の過程であるが、このグループシンキングにおけるフィードバックを用いながら共通目標を探求しようとしたのが本研究である。

〔註〕 日本グループダイナミックス學會編「グループダイナミックスの研究」では、フィードバックを次のように定義している。

『Feedback(再生、反芻)は、一度經驗した Process を後から再び(back again)反省し吟味することによつて、更に改善又は修正して、よりよく働かせ育て上げて Feed up してゆくことである。すなわちそれは一定の作業後における products をその cause となる process 又は factor に溯及して評價(検討)することを意味する、一つの group self-evaluation である。第二回 NTL 報告書にはその Research Design の章に「feed back とは個人間の相互作用に關する認識と材料とが、行爲の改善に導くような洞察力を得ようとするために、個人もしくは group に逆もどしされる過程のことである。」といつている。group discussion はこの feed back session によつて自覺的な技術過程として効果的に操作される。』

四 調 査 の 様 式

質問紙法・自由記入様式

「二 主題」の如き構想の下にまず戦争の可避不可避、日本の完全獨立の道、軍備反對及び軍備必要の理由などについて質問を行つたのが第一調査用紙(第1表)である。

共通目標の探求

——フィードバックによる試み——

坂 田 一

一 問題の所在

その中に對立を含む集團に、ある程度の統一を持たせ、モラルを高めるためにはどうすればよいか。これは現在のわが國にとつても、また現在の青年、特に學生についても常に提起されている重要な問題である。

二つの世界や冷戦は國際世界にのみ存する現象ではない。内と外とが一つになつて波瀾を來しているのが現在における特徴的な事態であつて、根柢にイデオロギーを包んで問題は複雑な様相を呈している。

人々は一般に戦争を嫌い、平和を愛するものであろうが、ある条件の下ではその反對であり得る。また平和を愛すると同時に戦争に加わることを學ぶこともあるであろう。

これに関連して、再軍備の問題も、獨立を契機として、自らの運命の決定を要請され、具體的な姿で現われてきた。何らかの解決の途を見出すことをしないで、自らを逃避せしめることは許されないような、さしせまつたいくつかの課題にぶつかつている。このような時點において、われわれのとるべき態度は、これらの對立の中に何らかの共通の目標、共通の領域を見出し得るかどうかということと重要な関連をもつている。

ではその實態はいかなるものか。この共通目標をいかに探求すべきであろうか。これが本研究の目的である。

二 主 題

主題として目下重要な再軍備の問題を選んだ。

- (1) 軍備反對の立場においても、軍備が必要であるとする立場においても、その究極目標は、平和、獨立、自由、平等などであつて、かなり共通するものがある。
- (2) これに至る道程においては、しかし一方は軍備を必要とし、他方は軍備をむしろ有害と考へて著しい對立を示す。
- (3) しかし更に追求するならば、軍備を有害と考へる人々も、その多くは外部よりの侵略、